

## 「CVカテーテル関連血流感染サーベイランス続行中」

ーリンクナースとしての関わり

看護部院内感染予防対策委員会

○ 公文 典子 有瀬 和美 水間美知子 弘瀬 裕子

リンクナース

松本 三枝 小松 由香

国立大学医学部附属病院感染対策協議会では平成13年5月、42大学CVカテーテル関連血流感染サーベイランスの実施を決定した。当院ではハイリスク・ハイボリュームである消化器外科病棟を対象とし以後継続している。今回、CVカテーテル関連血流感染サーベイランスを実施する中で、委員会の取り組みとリンクナースとしての関わり、及びサーベイランスの結果から部署で行った対策の実際を報告する。

サーベイランス実施前の消化器外科病棟の看護スタッフは、CVカテーテル挿入中の患者の発熱に対しCVカテーテル感染を疑うことが少なく、管理方法にも問題ないという自信を持っていた。医師はCVカテーテル挿入後の管理は看護師に任せているという現状であった。

委員会では、病棟スタッフに対しその目的と必要性の説明を行った。サーベイランス開始後は月2回の検討会と病棟巡回を実施しそしてデータから感染率を出し、部署にフィードバックするだけでなくスタッフへの指導教育を行ってきた。リンクナースは委員と看護スタッフのディスカッションの場や勉強会の場を設定した。フィードバックした感染率から部署での改善策を検討し、その実践をサポートした。改善策は感染率を受けて段階的に実施した。

### 実施した改善策（2001年12月～2003年2月）

1. 衛生的手洗いの強化
2. 消毒方法の統一
3. ルート管理と患者指導
4. 前回の改善策の確認と再指導
5. アルコール綿花の作成手順統一
6. マキシマル・バリア・プリコーションの導入
7. 閉鎖式輸液用プラグの導入。

### 結果

1. この2年間の推移から感染率は上がり下がりはあるものの確実に低下している。
2. サーベイランスを実施していく中で、消化器外科病棟のスタッフは毎日の観察の継続から発熱に対する疑問やCVカテーテル管理に対する関心が高まり行動へとリンクした。
3. 感染率が減少することで、さらに感染管理に対する意識も高揚していると思われる。

データ収集から感染率を出しそのデータを部署にフィードバックし対策を立案実施する、この一連の行動を継続することで、医療・看護の質は改善し向上するものであると考える。現在はCVカテーテル挿入部位、カテーテルルーメン数、挿入時の清潔度などの要因分析を実施している。それを部署に効果的にフィードバックすることが今後の課題となっている。

平成15年11月22日、南国市にて開催の第6回高知県院内感染対策研究会にて発表  
(抄録を掲載)